



Title	言語学習における学習者信念研究の概観と展望
Author(s)	綱澤, えり子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 16-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91542
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語学習における学習者信念研究の概観と展望

綱澤えり子

1.はじめに

信念とは、人間の行動と学習に関する全ての分野において中心的な構成要因とされ、心理学分野においては盛んに研究が行われている (Sakui & Gaies, 1999)。言語学習における信念は「言語適性の重要性、言語学習の本質、最も効果的と思われる学習方法などという問題に対する強い固定観念」(Ellis, 1994, p.478) や「言語教育において、教師や学習者が自分自身、教育、言語、学習、生徒について抱いている考えや理論」(Richards & Schmidt, 2010, p.52) と定義づけられ、少なからず学習行動に影響を及ぼすと考えられている (Dörnyei & Ryan, 2015)。第二言語習得において指導者が学習者の信念の発達に対する教育的効果を理解することは、自律した言語学習者を育成するために不可欠である (Mori, 1999) と考えられ、より効果的な指導計画の立案や、その実施に繋がる可能性がある (Sakui & Gaies, 1999)。学習者にとっても自分の信念を知ることは、効果的な授業内外の言語学習行動や、より深い自己認識と自律性に繋がる (Sakui & Gaies, 1999) とされており、学習者の信念を調査し、様々な要因との関連を明らかにしていくことは第二言語習得分野において今後も重要な研究課題であると言える。

本論文では学習者信念に焦点をあて、信念研究が盛んになった 1980 年代後半からの研究の系譜を概観し、信念を探るための調査方法と調査・研究内で明らかにされた信念がどのように学習者の学習行動や情緒要因に関連し、影響を及ぼすと考えられているのか、また信念研究の今後の展望に関して先行研究をもとに述べる。

2.学習者信念の研究の流れ

2.1 学習者信念研究の第一段階

言語学習の信念は 1985 年に Horwitz が学習成果を予測する重要な学習者要因として第二言語習得研究に導入して以来、応用言語学分野において多くの研究がなされている (Dörnyei & Ryan, 2015)。Horwitz は言語学習について議論されている様々な問題に関する学生の意見を評価するため (Horwitz, 1998, p.284)、アメリカの大学で英語を第二言語として学習する学生を対象として BALLI (Beliefs About Language Learning Inventory) とされる質問紙を開発した。BALLI は (a) 外国語学習の難しさ (b) 外国語学習の適性 (c) 外国語学習の性質 (d) 学習、コミュニケーション方略 (e) 動機付けと期待 の 5 つの調査領域、34 項目から構成されている。1988 年には Horwitz がアメリカの大学でドイツ語、フランス語、スペイン語を学ぶ学習者を対象として調査を実施し、言語に関する学習者信念は目標言語が異なる言語学習者グループ間でも類似していることが明らかになった。Horwitz の一連の研究より言語学習に関する学習者信念の体系的な研究が盛んになり (Kuntz, 1996)、BALLI をアセスメントツールとして用いた信念研究が様々な国で行われるようになった。学習者信念と学習行動の因果関係を探り (Barcelos, 2003)、成功した言語学習者が言語学習に成功した理由を解明しようとすることに焦点を当てた研究 (Horwitz, 2007) と学習者と指導者が言語学習の過程において何を信じているのかに焦点を当てた研究を中心した段階 (Barcelos & Kalaja, 2011) を学習者信念研究の第一段階と Dörnyei and Ryan (2015) では位置づけている。

2.2 学習者信念研究の広がり

その次の段階として、更に学習者信念研究は広がりを見せ、メタ認知的知識 (metacognitive knowledge) や認識論的信念 (epistemological beliefs) と学習者信念との関連性に関して研究がなされるようになる (Dörnyei & Ryan, 2015)。Wenden (1999) では、メタ認知的知識と学習者信念間の重要な関連性について述べられている (Kalaja & Barcelos, 2003)。メタ認知知識を学習者が獲得した安定した知識の一部であり、安定しているが時間の経過とともに変化する知識体系と考え、学習者信念と同義、もしくは学習者信念をメタ認知知識のサブセッ

トと捉えた。ただし、メタ認知知識と学習者信念の相違点として、信念は価値観に影響し、より強く保持される傾向が挙げられている。また、メタ認知知識と自己の学習を管理、調整するスキルであるメタ認知方略 (metacognitive strategies) は、メタ認知内の別々の要素であり、それらは補完的な関係にあるとしている。メタ認知的知識と信念と自己調整の関係については、メタ認知的知識や信念は、学習者が課題に取り組む前にタスク分析に基づいた効果的な計画を立てるために役立ち、学習者がタスクのモニタリングを行うために必要な情報となる。つまり、メタ認知的知識と信念が自己調整を促進することを示唆している。

認識論的信念とは、教育心理学分野の重要な概念の一つであり、学習者の知識と学習全般に関する信念 (Dörnyei & Ryan, 2015) である。Schommer (1990) の研究において、認識論的信念が複数の独立した次元からなる複雑なシステムとして特徴づけられることが明らかにされ、(1) 生来の能力 (2) 知識構造の単純さ (3) 知識獲得の迅速さ (4) 知識構造の確実性という 4 つの因子が特定された (pp.499-500)。これら 4 つの因子の他に「権威への依存」も仮定している。Mori (1999) では、認識論的信念と言語学習に対する信念との関連について、日本語を外国語として学ぶアメリカの大学生を対象に、Schommer (1990) で用いられた認識論的信念に関する質問紙の短縮版と言語学習信念に関する質問紙を用いて調査を行った。言語学習信念に関する質問紙は、「語彙学習は言語学習で最も重要な部分である」(p.386) という語彙学習の重要性や、自然な方法での学習「子どもが言語を学ぶように、自然に言語を学ぶことが最善である」(p.387) などの言語学習領域特有の 17 の仮説的な信念について問う 92 項目から構成された。その結果、学習全般に関する信念である認識論的信念については Schommer (1990) で示されたものと一致した。言語学習に関する信念においては探索的因子分析の結果 (a) 言語学習の難度 (b) 漢字習得の難しさ (c) 言語語学習の学習方略 (d) リスクテイク (e) 曖昧さの回避 (f) 第一言語への依存、という 6 つの因子が抽出された (pp.391-394)。抽出された信念因子を相関分析した結果、学習全般に関する信念と言語学習に関する信念は独立した構造として特徴づけられることが明らかになった。つまり、認識論的信念と言語学習に関する信念は定性的に異なると言える (Dörnyei & Ryan, 2015)。同時に、言語学習に関する信念は特定のタスク固有という特徴があるため認識論的信念から独立して存在するが、いくつかの認識論的信念は言語学習の信念に影響を及ぼす可能性についても指摘している。調査結果に基づき、信念が安定しているものとする従来の仮定に疑義を呈しており、学習経験が信念の変容を促す可能性があること、学習者が経験により信念を修正できるか否かによって言語学習成果が左右されることを示唆した。

学習者信念の変化に関しては Sakui and Gaies (1999) でも報告されている。信念に関する同内容の 2 回の質問紙調査とインタビュー調査を通して、1 回目と約 4 週間後に実施された 2 回目の質問紙への回答の相違は、その間に学習環境や指導者の変化によって回答者の信念が実際に変化したことによるものであるという洞察が得られた。信念は個人の経験に限らず、周囲の人間や環境によっても影響を受けることが認識されてきた段階と言える。

2.3 既存の学習者信念研究からの転換

Kalaja and Barcelos (2003) は従来の信念研究について批判的な見解を示し、一石を投じた (Dörnyei & Ryan, 2015)。研究の問題点として、信念を第二言語習得の他の要因と直線的な因果関係があるものと捉え、理論的知識や仮説に基づいて固定された心的表象と捉えている点、量的な方法でデータ収集・分析を行い、学習者を主体ではなく客体とみなしている点、文脈を考慮せずエティックな視点で学習者や教師の考えが反映される余地が無い点を挙げている (Kalaja & Barcelos, 2003, p.2)。それらを踏まえて、信念を文化的背景や社会文脈の中で形成される流動的で矛盾するものであり、認知的側面だけではなく社会的側面も併せ持つものとして捉えなおしている (Barcelos, 2003; Barcelos & Kalaja, 2011)。Barcelos (2003) では信念研究を定義やメソッドロジーなどに基づいて 3 つのアプローチにグループ化し、それぞれの利点や限界点について論じた (表 1)。その中で文脈における信念調査の必要性と、信念が生徒の行動とどのように相互作用するのか、また言語教室内外での学習経験において信念がどのような役割を果たすのかを理解する必要性を主張した。

表 1. 3つのアプローチの特徴、利点と限界点 (Barcelos, 2003, pp.26-27 を参考に翻訳)

	規範的アプローチ	認識論的アプローチ	文脈的アプローチ
信念の定義	信念は既成概念、誤った認識、意見と同義と見なされる。	信念はメタ認知知識とも述べられる：学習者が言語学習に関して持っている安定した、そして時には誤りを含む知識のことである。	信念は、ある社会における学習文化や言語学習の表象の一部である。
信念と行動の関係	信念は、今後の学習者の行動や自律性、効果的に言語を学ぶ学習者となることを示す良い指標と見なされる。	信念は、学習目的など他の要因の影響が認められるものの、学習者の自律性と言語学習における有効性に関する良い指標と見なされる。	信念は文脈に依存するものと見なされる。すなわち、学習者の信念は学習者の行動という文脈の中で調査される。
メソドロジー			
a) データ収集	リッカートスケール法を用いた質問紙	インタビュー セルフレポート	観察記録 インタビュー 日記 ケーススタディ ライフストーリー メタファー分析
b) データ分析	記述統計	内容分析	解釈分析
利点	文脈によらず、大量のサンプルを収集し様々な時間設定で信念を調査することが可能である。	学習者は自分の言葉を使い、詳しく説明し、言語学習の経験を振り返ることが可能である。	学習者自身の言葉や学習者の行動の背景を考慮して信念の調査を行うことが可能である。
限界点	研究者によってあらかじめ決められた一連の文言による質問のため、回答の選択が制限されてしまう。学習者は質問されていることに関して、研究者の意図と異なる解釈をしている可能性がある。	信念を学習者の発言のみにより推測する。	少量サンプルにしか適さない。データ収集、分析に多大な時間を必要とする。

Barcelos and Kalaja (2011, pp. 285-286) では、Barcelos (2003) を補完し信念の特徴を次のように述べている (表 2)。

表 2. 言語学習に関する信念の特徴 (Barcelos and Kalaja, 2011, pp. 285-286)

1. 変動する	第二言語習得に関連する同じ側面について、個人内で異なる時期または短期間に、異なる信念を持つことができる。信念は他者や環境要因、また情緒要因に影響され変動する。
2. 複雑で弁証法的である	安定している一方で流動的、社会的であるが個人的に重要、状況に依存するが一般化可能であり、二項対立を超越し、矛盾を含む多次的で多層的なものである。
3. ミクロ・マクロの政治的文脈や会話と関連する	信念は言語学習者の社会的・政治的文脈に関連し影響を受けることから、言語イデオロギーとも言われ、アイデンティティやグループ内のコミュニケーションと密接に関連している。
4. 感情や自己概念などの他の情動的な要素と本質的に関連する	学習者が自分自身について持っている信念と、恐怖や恥ずかしさ、自尊心などの感情は関連しており、行動に影響を与える可能性がある。
5. 他者指向である	信念は他者より影響を受け、新しい信念を取り入れたり古い信念を強化したりする。
6. 振り返りやアフオーダンスに影響される	学習者が信念について振り返り熟考することや、アフオーダンスによる刺激、感情、また社会・歴史的な文脈などの要因に影響され、改善される可能性がある。
7. 複雑な方法で知識に関連する	教師の知識は動的で状況に応じて文脈化されるものであり、自分自身の経験を振り返ることにより、知識は理論化され理解される。
8. 複雑な方法で行動に関連する	信念と行動の関係は単純な因果関係ではなく、動的であり、アフオーダンスや自分自身の行動の解釈、感情、自己概念、社会歴史的な文脈によって影響を受ける。

信念を複雑で流動的なものとし、学習者の背景や社会文脈との相互作用を捉えるために複数の多様な研究手法を用いる必要性が示唆されたことは、信念研究の大きな転換点となったと言える。

3. 学習者信念の調査方法

3.1 質問紙

学習者信念の調査において、最も広く使用されている調査ツールは Horwitz が開発した質問紙の BALLI である (Dörnyei & Ryan, 2015)。集計が容易で、多数の回答者を調査できるという利点があり、研究の目的が、異なるグループ間の信念を説明したり対比したりすることである場合は非常に有効な方法と言えよう (Barcelos, 2003)。一方で文脈から外れて信念が測定される点や (Barcelos, 2003; Wenden, 1987)、回答者が自分自身の言葉で回答できないという限界点も指摘された (Barcelos, 2003)。Sakui and Gaies (1999) は外国語として英語を学ぶ日本人英語学習者向けに、BALLI の質問内容を日本の文脈にあったものに改訂し、質問紙の回答の安定性や一貫性の程度を実証しようと試みた。調査方法としてテスト-再テスト法と回答者に対するインタビューを採用した。テスト-再テスト法で得られた結果の比較と 2 度目の質問紙調査後に行われたインタビュー調査により、回答者は質問紙項目で答えられる範囲で信念を回答に正確に反映しようとしたことを確認しており、質問紙の回答には十分な一貫性があると結論付けている。一方で、項目がいかにか慎重に開発されても質問紙だけでは様々な回答者の状況に対応できるものではなく、回答が困難な状況がうまれる

という固有の限界も報告されている。質問紙作成者の意図通りに対象者は質問項目を解釈するとは限らないという点もインタビューによって明らかにされた。この研究は質問紙の限界とインタビューのような補完的なデータの重要性を示唆している。

3.2 インタビュー、セルフレポート

インタビュー調査は、学習者が自分の言語学習に関して考えたことを明確に口述できることが基本的な前提となっている (Barcelos, 2003)。半構造化インタビューが多くの信念研究で採用されており、学習者自分の言葉で問題を詳しく説明することが可能である (Barcelos, 2003; Barcelos & Kalaja, 2011) ため、観察で得られたデータを補完する目的でも使用されている。セルフレポートは学習者としての成長や進歩に関する彼ら自身の認識を知るための重要な手段 (Navarro & Thornton, 2011) となっている。

3.3 日記、メタファー分析、教室観察など

文脈的アプローチで用いられる日記、メタファー分析、教室観察、その他様々な調査方法を組み合わせて利用することにより、学習者が言語学習について信じていることだけではなく、彼らがどのように行動するかを調査することが可能になり、文脈との相互作用を通じて信念が発達し変化するプロセスを包括的に理解することが可能になる (Barcelos, 2003; Navarro & Thornton, 2011)。

学習日記は Navarro and Thornton (2011) の自己管理的学習に関する信念研究で用いられ、学習者が学習目標設定、使用教材、学習の振り返りを記入した学習日記を学習者とアドバイザーとの間で対話的にやり取りすることで、双方が学習に関する意思決定の背景をより明確に理解することが可能になったと報告されている。学習や出来事の詳細な記録により、教室外の学習を観察することが可能になり (Miller & Ginsberg, 1995; Navarro & Thornton, 2011)、個々の学習者の信念と行動の間の相互作用の本質の洞察を得ることも繋がった (Navarro & Thornton, 2011)。

メタファー分析は、信念を分析するため以前から使用されている (Barcelos, 2003)。Miller and Ginsberg (1995) ではロシアに留学しているアメリカの大学・大学院生を対象に調査を行い、学習者が明示的に述べる発言に加えて、発言の中で使用される比喩は彼らが根底に持っている言語学習モデルの表象と考え、意識せず用いた比喩的な表現も分析した。「学習はパズルをすること」「学習は言葉の実験である」(p.306) などの比喩は、言語に正解があると考え、単語を実際に試し、試行錯誤をしながら適合するものを探すという言語学習に関する信念に合致していた。

メタファー分析、教室での観察、談話分析は学習者の環境や文化を理解した上で、それらと相互作用する社会的存在として学習者を描写することが可能になる。それゆえに質問紙やインタビューなどの調査方法よりも学習者を肯定的に捉えることができる優れた調査方法 (Barcelos, 2003) とも言えよう。しかしながら、それらの使用は、非常に時間のかかる作業になるため、大規模な調査には適さないという限界もある。

4. 学習者信念と学習方略、習熟度、動機づけとの関連

4.1 学習者信念と学習方略の関連

第二言語習得に関する信念と言語学習方略との関係を調査した Yang (1999) では、言語学習に関する学習者の信念が学習方略の使用に影響を与えることを明らかにした。学習者の目標言語である英語学習に関する自己効力感、すなわち自分には言語習得の能力が備わっているという信念は、あらゆる学習方略と関連することが示された。中でも積極的に英語に触れる機会を増やそうとする機能的実践方略の使用と特に強く関連し、英語を話すことが重要とする信念は、単語を繰り返し発音して練習するなどの口頭練習方略の使用に関連した。この学習信念と学習方略使用、加えて動機づけの関連は一方向のものではなく、相互に影響しあう「循環的な関係」(p.531) であることが示唆された。

4.2 学習者信念と達成度、習熟度との関連

言語学習に関する信念とタスクの達成度、習熟度の関係を Mori (1999) では調査している。達成度や習熟度の上昇に関連した信念は、学習過程においては間違えても構わないというリスクテイクに関する信念や、ターゲット言語学習が容易なものと捉える信念であった。反対に、学習能力が生まれながらのものであり本質的に固定されているという信念は、習熟度が低くなる傾向と関連し、「学習能力は努力によって改善できないという信念が、学習の漸進的なプロセスを妨げる可能性がある」(p.399) ことが示唆された。すなわち、そのような信念により、継続的に少しずつ学びを積み重ねることが難しくなると言えよう。単純明快な解答を求める信念を持つ学習者は、外国語の習熟度が低くなる傾向があることが明らかになった。これはまた、学習は段階的ではなく迅速になされるという知識獲得の迅速さを信じる学習者は自分の学習理解度を過大評価する傾向に繋がる (Mori, 1999; Schommer, 1990) ことも示されている。

4.3 学習者信念と動機づけとの関連

日本人大学生を対象とした研究である Yashima, Nishida and Mizumoto (2017) では、第二言語習得における動機づけのメカニズムを説明しようとする理論的枠組みである L2 動機づけ自己システム論 (Dörnyei, 2005; 2009) と学習者信念との関連が明らかにされた。コミュニケーション中心の学習方略が効果的であると考えた信念 (コミュニケーション志向性) は 第二言語を使ってなりたい理想の自己像である L2 理想自己に繋がり、文法訳読中心の学習方略が効果的であると考えた信念 (文法訳読志向性) は、第二言語を使ってなるべき自己像、いわゆる周囲や社会からの求められる自己像である L2 義務自己に繋がった。つまり、L2 理想自己の方は動機づけに強く繋がることから、コミュニケーション志向性の信念を持っている学習者の方が、より動機づけが高くなるという傾向が示唆された。また性差に関しては、男子学生の方が文法訳読志向性に強く影響を受けているという結果が示され、この結果について社会文化的背景を考察する必要性が述べられている。

5.今後の展望

現在多様な教育現場において急速に広がる教育方法である、オンライン学習や AI との会話練習やフィードバック、機械によるスピーキングの採点等に関しても、今後学習者信念研究が蓄積されることが、教育をする側と学習者の齟齬を少なくすることの一助となるであろう。

Sakui and Gaies (1999) では、教育カリキュラムの変更が学習者信念に影響を与えた可能性を推察している。今後、できる限り各教育機関でも継続的な学習信念調査を行うことにより、カリキュラム変更・修正がどのように学習者信念に影響を与えたのかを教師やカリキュラム立案者が認識し、理解を共有することが可能になるであろう。このことが更に学習者のニーズに寄り添った言語教育に繋がる可能性があるといえる。

また、英語の早期教育がますます盛んになっている社会において、日本の文脈で早期教育を受けている学習者の信念や保護者の信念に関しても調査する必要があるのではないだろうか。自分の考えを言語化することが難しい就学前の言語学習者を対象とした調査方法、例えば学習者としての自分について、あるいは言語学習について、自由に絵を描くことや切り抜きを組み合わせることでコラージュやポスターを作製することで考えを表すなどの調査方法 (Kalaja, Barcelos, & Aro, 2017) の確立を模索していく必要があると考える。より多様な学習者の信念を捉えるため、調査方法も従来以上に多様な方法を用い、刻々と変化する学習者を取り巻く環境や社会状況、価値観に応じた信念研究が期待される。

参考文献

- Barcelos, A. M. F. (2003). Researching beliefs about SLA: A critical review. *Beliefs about SLA: New research approaches*, 7-33.
- Barcelos, A. M. F., & Kalaja, P. (2011). Introduction to beliefs about SLA revisited. *System*, 39(3), 281-289.

- Dörnyei, Z. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Lawrence Erlbaum.
- Dörnyei, Z. (2009). The L2 motivational self system. In Z. Dörnyei & E. Ushioda (Eds.), *Motivation, language identity and the L2 self* (pp. 9–42). Multilingual Matters.
- Dörnyei, Z., & Ryan, S. (2015). *The psychology of the language learner revisited*. Routledge.
- Dweck, C. S. (2006). *Mindset: The new psychology of success*. Random House.
- Ellis, R. (1994). *The study of second language acquisition*. Oxford University Press.
- Horwitz, E.K. (1988). The beliefs about language learning of beginning university foreign language students. *The Modern Language Journal*, 72(3), 283-294.
- Horwitz, E. K. (1999). Cultural and situational influences on foreign language learners' beliefs about language learning: A review of BALLI studies. *System*, 27(4), 557-576.
- Horwitz, E. K. (2007). Why student beliefs about language learning matter: Issues in the development and implementation of the beliefs about language learning inventory. In H. J. Siskin (Ed.), *AAUSC 2007 from thought to action: Exploring beliefs and outcomes in the foreign language program* (pp. 2–8). Heinle.
- Kalaja, P., & Barcelos, A. F. (2003). *Beliefs About SLA: New Research Approaches*. Springer Science & Business Media.
- Kalaja, P., Barcelos, A. M. F., & Aro, M. (2017). Revisiting research on L2 learner beliefs: Looking back and looking forward. In *The Routledge handbook of language awareness* (pp. 222-237). Routledge.
- Kuntz, P.S. (1996). Beliefs about language learning: The Horwitz model. (ERIC Document Reproduction Service, No. ED397649).
- Miller, L., & Ginsberg, R. (1995). Folklinguistic theories of language learning. In B. Freed (Ed.), *Second language acquisition in a study abroad context* (pp. 293– 315). Benjamins.
- Mori, Y. (1999). Epistemological beliefs and language learning beliefs: What do language learners believe about their learning? *Language Learning* 49(3), 377-415.
- Navarro, D., & Thornton, K. (2011). Investigating the relationship between belief and action in self-directed language learning. *System*, 39(3), 290-301.
- Richards, J. C., & Schmidt, R. (2010). *Longman dictionary of language teaching & applied linguistics*. Pearson Education.
- Sakui, K., & Gaies, S. J. (1999). Investigating Japanese learners' beliefs about language learning. *System*, 27(4), 473-492.
- Schommer, M. (1990). Effects of beliefs about the nature of knowledge on comprehension. *Journal of educational psychology*, 82(3), 498.
- Wenden, A. (1987). How to be a successful language learner: Insights and prescriptions from L2 learners. *Learner strategies in language learning*, 103-117.
- Wenden, A. L. (1999). An introduction to metacognitive knowledge and beliefs in language learning: Beyond the basics. *System*, 27(4), 435-441.
- Yang, N. D. (1999). The relationship between EFL learners' beliefs and learning strategy use. *System*, 27(4), 515-535.
- Yashima, T., Nishida, R., & Mizumoto, A. (2017). Influence of learner beliefs and gender on the motivating power of L2 selves. *The Modern Language Journal*, 101(4), 691-711.